

# 年次総会から付託の

## 「韓国の主にある兄弟姉妹へ」の書簡

### 韓国委・理事会が書簡を発表

年會に緊急議案として提案された標記書簡内容については、（経緯前頁号記載）韓国問題特別委員会及び理事会で推敲検討の作業をすすめていたが、今回理事会より後記の書簡文が諸教会に発表された。理事会は、韓国バプテスト連盟よりの宣教師派遣問題の協議とあわせ、金子常務理事を連盟代表として同国に派遣、本書簡を直接手渡した。

なお本書簡の取交には山下韓国問題特別委員長も同行し、謝意を表明すると共に今後の交わりについて懇請した。

韓国の主に在る兄弟姉妹へ

韓国プロテスタント宣教百年にあたり、私たちはあなたがたの信仰とその働きに深い敬意をあらわし、主が貴国であらわしておられるくすしきみわざを思つて、心からおよろこび申し上げます。

私たちは、また、この機会に、これまであなたがたとあなたがたの同胞に対して犯してきた私たちの罪過を言いあらわし、ゆるしを求めるとともに、真実の交わりがあなたがたの間に確立され、協力のわががすすめら

れていくことを心から願っています。

わが国と貴国とは、地理的に最も近い隣国であり、古くから交流をもち、幾多の変遷を経て今日に至っていますが、この兩者の關係について、貴国のある歴史家は中国のことわざを引用して、「足を踏む人、踏まれる人」と指摘しています。「日本と韓国の百年は、踏む」と踏まれる「ことの一世紀だ」として過言ではない」という発言を、私たちは深いざんきの念をもつて受けとめています。

ことに、一九一〇年の日韓併合にはじまる三六年間の植民地としての支配は、多数の貴国民を死に至らしめ、ぬぐい去ることのできない苦悩と痛みをあなた

がたとあなたがたの同胞に与えました。一九一九年の三一運動にみられる日本政府の仮借ない弾圧政策は、たとえば、堤岩里教会の虐殺事件を生み、さらに関東大震災におけるあなたがたの同胞への残虐行為へと拡がり、天皇の名による同化政策のもとに、あなたがたの民族の誇りをふみにじり、生命や財産を次々に、しかも平然と奪っていききました。朝鮮神宮をはじめ貴国の各地に建てられた神社への強制参拝、朝鮮語の使用禁止、日本名への改姓、労働力としての日本国内への強制連行等々、枚挙にいとまないわが国の暴挙は、なんと深い傷あとをあなたがたの中に残していることでしょうか。

それらの暴虐に対して、日本の教会は無力であったばかりでなく、同化政策を神の摂理として首肯し、積極的に支持し推進しようとしたものも少くありませんでした。私たちは、隣人の苦悩をかえりみることもなく、むしろむさばりに手をかしていた私たちの歴史を深く恥じています。

一九四五年の日本敗戦によって、いまわしい時代に一応の終止符がうたれたとはいへ、今日も貴国に対する経済的な侵略や、観光買春などにみられる日本人のおごりが、あなたがたの同胞の生活と人権をそこない、多大の苦痛を与えている事実を、私たちは低頭して認めざるを得ません。七〇万人に及ぶ在日韓国人・朝鮮人に対するさまざまな差別、あるいはサハリン残留韓国人・朝鮮人の祖国復帰、韓国・朝鮮人被爆者の問題等々が何ら解決をみないまま、多くの貴国民に今なお苦渋を強いていることに、私たちは深い心のうずきを覚えます。それにもかかわらず、「教科書検定」問題にみられるように、日本政府は過去の誤ちを認めようとせず、むしろ事実を隠べいし、あるいは正当化をはかろうとさえしています。私

ちはまた、たとえば金大中氏ら致事件にみられるように、来日中の貴国民の生命と安全が充分に保証されないままに、政治結着をすることをすすまうなこの国の在りかたを哀しく思い、心からわが国と国民の覚せいのため祈りをささげずにはおれませ

ん。貴国の全斗煥大統領のこのたびの来日に関し、日韓交流史上、韓国元首の来日は最初の出来事であり、それによつて「過去を一切水に流して、新しい日韓時代を迎える」という論調を耳にしますが、私たちは、真の隣人としての友好親善が、いわゆる政治折衝によつてもたらされるものではなく、「踏んだ」ものが「踏まれた」ものに対して心から謝罪し、誤ちを二度と犯さない決意を新たにすることからはじめられるものと信じます。私たちは自己を正当化するこ

私たちは、わが国において執ように繰返えされている「靖国神社国営化」の動きに対して私たちの信仰の良心に従って反対の運動をすすめながら、神ならぬものを神としていく勢力のあなどりがたさを実感しています。そのような勢力に対して敢然と立ちむかい、迫害と脅迫に耐えてこられたあなたがたの信仰の歴史に学ぶとともに、私たちは、再び隣国の足を踏まないためにも、このような力の台頭を是認し、許容することがあってはならないと固く決意しています。

私たちはまた、公害や差別の問題へのささやかな取り組みの中で、人間の自己栄化のころみがいかに人と人のきずなをたちきり、人間の存在そのものを破壊に導くかということ、みことばから改めて教えられています。そして、わが国における福音宣教の急務をいよいよ強く感じています。

私たちは、過去の誤った歴史を深くかえりみながら、同じあやまちを繰返えすことがないように、聖書のみことばに堅く立ち、現在私たちが直面している諸問題に、真しな祈りをもって、地の塩、世の光としての役割を果たしていきたいと思えます。霊

に燃えて、宣教のわざに励みたいと願っています。どうぞ、私たちのためにお祈り下さい。

さらに私たちは、真の隣人として、福音宣教のよきパートナーとして、また、「見張人」として、あなたがたと共に歩むことを許していただきたいと願っています。あなたがたとの交わりを通して、私たちは、イエス・キリストの十字架の苦難と復活の生命にあずかる希望、また、祈りささげるよろこびを、さらに深く学ぶことができるでしょう。

どうか、主にあつて私たちを受け入れて下さいますように。貴国での宣教のわざが、益々、祝福されますように。

主の御名が、貴国において、日本で、さらに全世界であがめられますように。御国が来ますように。

アーメン

一九八四年八月二四日

第三八回年次総会